

原 著

アメリカ合衆国草創期における寄宿制障害児教育施設の慈善性と
教育目的・本質との関連

中村満紀男

本論文の目的は、19世紀前半のアメリカに開設された障害児の教育施設の開設趣旨とその変化について、学校関係者や当事者（親や障害者）がどのように関与したのかを明らかにすることである。1810年代後半以降に開設される聾啞院は上層の要望から創設が構想されたが、開設後、財源および関係者の関与の変更によって博愛的基盤から公共化への変化を辿る。しかし校長に聖職者が多かったこと、聾啞者は、第一次産業に就労可能で貧困問題が深刻でなかったことなどから、学校側の慈善性やスティグマに対する意識は低かった。これに対して1830年代初めに開設される盲院では、就労する場がないために、職業自立が最大の目標であったが、盲児に対する慈善視とスティグマの付与が職業自立の最大の障害となる。そのために、盲児が職業自立できるための教育の強化と社会的条件の整備を進めることによって、学校教育機関へ脱皮する基盤を作ることができた。1840年代末以降に開設される白痴学校は、教育と学校の概念から再編しなければならなかったが、聾啞院と盲院の成果を吸収し、その問題と限界を超える理論的・実践的可能性があった。

キー・ワード：19世紀前半アメリカ アサイラム 聾啞院 盲院 白痴学校 慈善性
スティグマ

はじめに

障害児の教育が18世紀半ばのヨーロッパで、聾という特定の障害のある子どもを対象に学校という場で教育が始まってから、現代におけるインクルーシブ教育に至るまで、教育にかかわる人々も、制度も、そして教育に関する考え方も変化してきた。なかでも、教育によって何を実現するかという目的と、教育の独自で非代替的な営みとしての本質は狭小で直接的な内容から、広範で抽象的かつ一般的な内容に変わってきた。それゆえ、現代における学校の目的とその具体的内容である目標は形式的で画一的な内容になる傾向があり、それが実際に意味すると

ころは必ずしも明確であるとはいえない。しかしながら教育の目的・本質は、日常的教育実践がつねに参照すべき指標としての位置にある。

そこで、現時点における教育の目的・本質の意味を理解するとともに、それが一つの相対的な到達点であることを認識するために、近代における障害児教育の成立以降の障害児教育における目的と本質に関する変遷と意義について整理しておくことは、障害児教育の在り方を考察するうえでも実践上も意味があると思われる。

上記のような趣旨から、障害児教育機関において、校長・施設長・教員や研究者が障害児に教育を提供するにあたって何を意図していたのか、親や障害当事者がそのような教育をどのように評価していたのかについてその変遷と意味

を把握するために、障害児教育の創始から現代に至るまで、関係者が論じた教育の目的・本質とその背景や理由について一連の研究として追究する。

その場合の分析は、一定の観点と基準にしたがって、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）を対象として行う。教育の目的・本質（論）を分析する基本的観点¹としては、時期区分と障害カテゴリー、通常教育、対象者、社会、専門家、当事者に設定する。全体の時期はそれぞれの相対的特徴から5つ（①1810-40年代、②19世紀末-1910年代、③1920-50年代、④1960-80年代、⑤1990年代以降）に区分する。障害は基準カテゴリー（聾・盲）と比較カテゴリー（知的障害）およびそれ以外の障害カテゴリーと状態に分化される。しかしこれらの観点や基準は、すべての時期に同等に出現するわけではない。

研究対象としてアメリカを選択した理由は、1810年代の障害児教育機関の創設から現代におけるインクルーシブ教育運動の展開まで、障害児に対する教育の目的と本質を俯瞰するうえで、相対的に条件がそろっているからである。すなわち、民主制・共和国というアメリカの政治体制ゆえに広く障害児に教育機会が提供される可能性がありえたとし、本研究の課題を検討するうえで関連する研究も資料も比較的整っているからである。

本論文で検討する時期と対象は、19世紀前半のアメリカにおいて開設された聾唖院、盲院、白痴学校とする。

ところで1810年代後半に創設された聾唖院は、聾唖児という特定の障害カテゴリーの子どもに対して、従来の保護だけを目的としない、教育を主機能とする新しいタイプの慈善事業であり、1830年代前半には盲院の創設を導くこととなった。さらに聾唖院と盲院が教育の目的と本質において通常の教育と共通点および連続性をもつものに対して、1840年代末に成立する白痴学校は、学校および教育の概念において聾唖院および盲院との不連続性と連続性を不可分な条件として成立したことが、19世紀末に聾唖院と

盲院が学校化、白痴学校が施設化という対照的で異質な展開を辿る一因になったのである。

なお歴史的研究としての本研究では、白痴（idiot; idiocy）や唖（dumb; mute）のように、当時用いられた用語を邦訳して使用するものとする。聾唖院は聾学校の、盲院は盲学校の慈善事業段階の教育機関を示す用語として使用する。白痴学校は同時期中度級以下の精神薄弱児を主対象とする教育機関を示す。「院」はasylumやinstitutionの訳語であり、学校の旧称として明治初期の日本で一般に使用されていた。

先行研究については本研究のような障害児教育の目的と本質というテーマに焦点を当てた研究は見あたらないが、障害児の教育を論じる際に、教育の目的と本質をどのように考えるかは不可欠の項目であり、何らかの検討がなされているので、必要に応じて適宜、それらを参照することとする。

I. 上層の親の発意に基づく新規慈善事業としての聾唖院の創設

1. ハートフォード聾唖院創設過程における教育の目的と本質の変化

(1) 創設構想段階における教育の趣旨：アメリカ最初の障害児教育専門機関として開設されたのは聾唖院であった。聾唖院の創設は、1810年代後半から1820年代初頭にかけて、コネチカット州ハートフォード、ニューヨーク、フィラデルフィアの北東部三都市で実現するが²、創設動機としてのキリスト教慈善や博愛家による運動は各都市で共通するものの、各都市の創設計画やその推進者は必ずしも同じではなかった。このことは、後述するように聾教育の目的と本質に密接にかかわることになる。

貧困層に対する教育的救済という新しい慈善事業となった聾唖院の創設の経緯（安藤 [2001] 40-42；荒川 [1970] 261-277；上野 [1991] 57-59；Williams [1893]）について、聾唖院の設立と教育目的を中心に略述する。ハートフォード校（The Connecticut Asylum for the Education and Instruction of the Deaf and Dumb Persons.

1819年にThe American Asylum at Hartford, for Education and Instruction of the Deaf and Dumbに改称)は、アメリカ最古の聾学校としてだけでなく、その設立趣旨が明確であった点に特色がある。いいかえれば、創設運動が他校に比べて組織的で中心となる担い手があり、しかもそのなかに親が含まれていた。また本校は、慈善的教育機関の利用者を特定の階層に限定しない、旧世界には少数であった新しい障害児教育機関を創設したという意味でも、アメリカン・モデルの原型となった。

ハートフォード聾啞院創設の発端は、中途失聴の聾啞児をもつ上層の親の願望から生じた³。コネチカット州ハートフォードの旧家に属する外科医で博愛家のM. F.コグスウェル (Mason Fitch Cogswell 1761-1830) には、病気により2歳で失聴したアリス (Alice) という娘がいた。また、ハートフォードの東南約30kmの距離にあったヘブロン (Hebron) にはS.ギルバート (Sylvester Gilbert 1755-1846)⁴という、もう一人の名士がいた。法律家で、長年にわたって州議会議員を務め、連邦議会議員の経歴もある彼には、5人の聾啞の子どもがいた (Valentine [1993] 18-26)。隣接するマサチューセッツ州セイラム (ハートフォードから約200km) にも、資産家であるE. キンブル (E. Kimball) に聾の子どもがいた (バン・クリーブ／クローチ [1993] 33-34)⁵。彼ら上層の親は、聾啞院を設置して、教育によって子どもの言葉の維持と回復を願ったのである。

コグスウェル医師を中心とする設立運動の担い手は、会衆派の聖職者 (上野 [1975] 113)、実業家、政治家、博愛家、富裕層であった。彼らの活動は、言葉を持たないために異教徒とみなされていた聾啞者に対して、言葉の獲得によってキリスト教徒に育成するという愛他的慈善行為として行われた。

加えて、発達可能性に対する教育力への信頼と聾者の社会的位置づけが、この創設運動の前提として存在していたことに留意しておく必要がある。それは、ギルバートが筆者と推定され

る (Valentine [1993] 20-21; note 21) 文章から理解できる。「聾啞者」と題する小論文において筆者の「一人の親」は、1812年に「私たちのこの市民集団 (聾者-引用者) は、多くの学問分野 (arts) と一部の科学において大きな進歩 (improvement) が可能であるのに、アメリカで完全に無視されているのは、何と残念なことか」と述べる (A parent [1901] 135)。

この文章で注目すべき点は2つある。一つは、聾者が教育によって多面的に大きな進歩が可能であるという点であり、もう一つは彼らを「市民」と位置づけている点である。前者では、アメリカは共和国として独立した経緯から、共通の教育目的と教育内容を想定した公立学校制度に見られるように、教育とその機能について肯定的な環境にあったけれども、万民教育の基盤となる近代啓蒙思想が聾児にも援用されたこと、同時に教育内容として教養的教育を想定していたであろうことが推論される⁶。

もうひとつの点については、さらに注目される。言葉がないために、キリスト教徒という市民要件を満たしていなかった聾啞者を、教育によってキリスト教徒=市民になりうるとして、障害のない人々と社会的に同列におき、社会的排除者リストから聾啞者を抹消しようと意図していたのであった。このような発想が可能となったのは、筆者のギルバートが当時の超エリートとして高度な教育と市民生活を体験していたからであろうし、彼が念頭においた対象が自分の子弟であったからである。

こうして聾啞院の教育は、富裕層の親を発意者として、言葉のない、あるいは喪失しつつあった聾啞者を隣人・同胞としてキリスト教徒に育成し、教養的教育を提供する趣旨の慈善事業として着想されたのであった。したがって、聾啞院教育の着想時点そして開設初期においては、教養あるキリスト教徒の市民というイメージ以外には、教育後の境遇や将来像を展望した教育目的や本質に関する明確な構想がなかったものと思われる。

(2) **公金の投入と教育目的・本質の公共性**：しかしながら、コグスウェルやギルバートの個人的な教育動機が社会的な動機に転化するのとは必然であった。というのは、彼ら以外の創設関係者による聾啞児の教育への関心はキリスト教慈善に裏づけられた博愛にも動機があった⁷からであり、聾啞院が想定する教育対象は富裕層の少数の生徒ではなく多数の、しかも貧窮な聾啞者であったからである。他方で、州内の聾啞者数は全部で74人 (Valentine [1993] 20) に過ぎなかったから、富裕層の学校として経営することは財政的に困難であった。こうして、上層子弟の教育だけでなく、教育的救済の対象に下層聾啞児を包含させ、州資金を得ることで、州の政策として展開する可能性が当初から潜在していた。そのような方向が、聾啞院を社会的かつ財政的に安定させる手段でもあったからである。

確かに、貧しい階層の聾児（そして、後には他の障害カテゴリーの子どもたちの教育でも）の教育可能性が上層の聾啞子弟と同等視されたとはいえないし、聾啞者が一般的な市民条件を獲得するには、それから長い時間を要することにはなるが、それにしても、上記の上層の親の考え方は、聾啞者（そして他の障害者）の教育可能性と社会的地位について、将来、アメリカ社会に是認される出発点となったことは確かである。共和国アメリカでは、権利と平等を障害者に拡大することを社会的に納得させる実績（この場合は教育成果）が、条件として必要であったのである。

こうして、ハートフォード聾啞院を富裕層の学校にではなく、対象を貧困層にも拡大、すなわち公共化したのは、財源における公金の投下によってであった。コネチカット州議会の1816年の5千ドルの支出決定⁸を初め、1817年4月の開校後に実現したニューイングランド諸州の州議会による州費生派遣によって、法人立のハートフォード聾啞院は公共性を付与されるようになる。州費の支出は広く州民に利益を提供するものであるから、聾啞院の対象は私費生だけ

でなく、貧窮な生徒を州費生としてはば無償で受け入れるという教育機会の拡大に結びつくことになる。

入学者の階層格差は、聾啞院入学者の教育内容の差異をもたらす危険があった。自活手段の獲得は庶民層の聾啞児には不可欠であっても、富裕層の私費生ではそうではなかったからである⁹。一つは、生徒が属する階級の差異と教育内容の差異の問題、もう一つは、スティグマの付与である。公金の投入は、その危険を薄めることになった。

しかし州費の投入は別の問題をもたらす。第一に、広く聾啞児に教育を行うことにより、キリスト教徒への育成と基礎的教育以外の教育の必要およびその基準を聾啞院に要求することになる。第二に、聾啞院を州救貧政策の対象とすることになり、聾啞院の教育はその政策の実現と関連づけられる。第三に、州救貧政策の対象化と聾啞院教育の無償化は、聾啞児と聾啞院に社会的劣等というスティグマを付与することになる。当然ながらこの三つの問題は相互に関連しているが、そのことが、聾啞院の性格に多面性を与えることになる。

いわば慈善は私事性と公共性（州資金による公的慈善）という矛盾を孕みながら、聾啞院の教育において具体化されることになる。そのような矛盾を孕んだ慈善性は、コネチカット校以降の初期3校以降、担い手の構想、校長、州当局において共有されることになる (Best [1943] 403-40)。

2. ニューヨークとペンシルベニアの聾啞院 創設における教育の停滞と目的・本質

ニューヨーク聾啞院 (The New York Institution for the Instruction of the Deaf and Dumb, 1818年開設. Currier & Fox [1893]) とペンシルベニア聾啞院 (The Pennsylvania Institution for the Deaf and Dumb, 1820年開設. Allen [1893]) の創設過程は、設立・運営の中核的担い手が不明確で、実践にあたる校長の選抜に失敗した点で共通していた。ニューヨークでは聖職者と2人の医師が中心となって聾啞院設立運動が進めら

アメリカ合衆国草創期における寄宿制障害児教育施設慈善性と教育目的・本質との関連

れたが、強力な推進役に欠けていた。フィラデルフィアでは、ハートフォード校創設への寄金運動のために同市を訪問したギャロドットとクラークに触発された面が強い。フィラデルフィアでは、専門的見識と技倆をもった教員の確保にも失敗した。明確な教育の目的とその実際化および担い手が不在であったことになる。

その結果、創設の担い手の意識は貧困な聾唖児＝異教徒に対する宗教的・慈善的救済というレベルに留まったし、専門性を備えた教員の不在のために、言葉の獲得という聾唖院最大の教育目標が十分に達成されないことになる。1826年の創設者の一人による講演では、「本校は慈善として開設された」「本聾唖院は本質的に慈善的な機関である」と慈善性が繰り返し強調される。全生徒数62名のうち私費生（全額および一部負担）の11名以外は、州・団体・聾唖院の慈善生であった（Akerly [1826] 3-4）。

尤も教育成果が低かったのは、遅い入学年齢と短い在学期間、聾教育専門の校長の着任が遅れたことによるところも大きかった。ハートフォード聾唖院の最初の生徒100人の平均年齢は18歳であり、在学期間は4年間で適切とされたが2年間しか在学しなかった生徒もいた（上野 [1991] 74）。ニューヨーク聾唖院の平均入学年齢は12歳、平均在学期間は4年半だった（Peet [1854] 226）。ケンタッキー聾唖院の最初期の17名の生徒の年齢は最年長は30歳、最年少は12歳であったが、20歳以上は9名で、平均年齢は約19歳であった（Fosdick [1893] 19）。

在学期間規定は長期化していくが、入学年齢は教育効果の理由からむしろ遅くなり、19世紀半ばでは12歳が適当とされた（上野 [1991] 75）。また、聾唖教育専門の校長は最初から用意されておらず、長期の着任期間になるのは、ニューヨークでは1831年、フィラデルフィアでは1822年であり、いずれもハートフォード校が供給した。1人は聖職者、もう一人も高い宗教的教養の持主だった。

こうして、顕著な教育成果の展望が得られないことは、寄付による財源獲得が困難になるこ

とを意味したから、運営には早期に公的資金の導入が必要となる。この事態は、聾唖院が州の救貧政策に包含されることを意味し、同時に教育の対象選択と目的と内容に大きな影響を与えることになる。教育対象としては貧窮者を含む広い階層から選択されることになり、教育目的は、キリスト教徒の育成だけでなく、職業教育による生活能力を付与することが、州政府ならびに社会から要求されることになる。その結果、州政府の関与や介入も発生するようになる。これには、理事会や校長と州政府・州議会との力関係が反映されることになるが、州の関与や介入の意義は、初期ではプラスに働いた。ニューヨーク聾唖院では、州教育長による関与が早期から生じた。1827年に建設費1万ドルを州議会が支出する条件として、州教育長の同聾唖院の視察と指導法の改善勧告が含まれたからである。

しかし初期には、州側に明確な政策があったわけではなかった。アメリカ最初の州立聾学校となるケンタッキー校（The Kentucky Asylum for the Tuition of the Deaf and Dumb）では、聾唖の子をもつ州議会議員E. バービー将軍（General Elias Barbee）¹⁰が法律家で政治家であったJ. ローワン（John Rowan 1773-1843）の協力を得て、1822年12月7日に同校の法人化が州議会で認可され、翌1823年4月10日に開設される。しかもハートフォード校と同じように、初期アメリカを代表する政治家の一人で連邦議会に大きな影響力をもっていたH. クレイ（Henry Clay 1777-1852）の尽力により国有地を2度にわたり与えられた。ところが最初の教師はいかさま師でその後任は能力に欠けていた（Fosdick [1893] 3）。1823年4月27日には、バービーの娘、ルーシー（Lucy）を含めて3人の生徒が入学したが、親も学校理事会も、漠然とした教育への期待だけしかなく、このような指導条件下で明確な教育計画もなければ、州立校としての政策的要求も、オハイオ州立盲学校で導入したような貧窮聾唖児のスティグマを解消する対象規定もなかった（私費生規定の廃止は1882年、Fosdick [1893]

36)。しかし本校は、南部諸州を初め、近隣州の聾唖児が利用する教育機関として発展していく。なお本校に黒人部が開設されるのは1885年からである (Fosdick [1893] 84)。

こうして、ハートフォード聾唖院以降の3都市における聾唖院創設において、教育という新しい救済方法を採用したことは、30歳前後の若い世代が創設運動の有力メンバーとして参加していたことと関連があろう。しかしながら、慈善性を超える聾唖児の教育に関する見識と問題意識は、創設期の担い手には用意されていなかったのである。そのうえ、ハートフォード校以外の初期聾唖院には、ハートフォード校に備わっていた創設・運営の組織と教育の専門家を欠いていたから、聾唖院教育の社会化は授産＝職業教育という救済政策的な方向に偏ることになるが、それを含めて経営方針は一貫しなかったのである。ハートフォード以外の都市の聾唖院は意図が慈善に限定されたうえに、聾唖児に対する教育機会の創始という個人的な関心を社会的に拡大するという意識に乏しかった。

3. 聾唖院創設段階の教育論における意図の直接性および限定的な教育内容と当事者の位置

こうして聾唖教育では、聾唖(者)に対するスティグマへの意識、彼らの教育機会の社会的根拠についての議論では、開設前の親(ギルバート)の所見を除けば、少なくとも事業を阻害する要因として深刻に認識されことはなかったものであり、あったとしても教育によって解消可能と考えられたのであった。

この結果、慈善事業の枠内で聾唖者の依存的状态と宗教的無知からの解放という、聾唖者の現実の境遇から着想された直接的な内容の伝達が主たる教育目的となり、それ以外の教育の必要性は認識されなかった。T.H. ギャローデットは、「道徳的真理は知的真理よりも高い序列であり、精神に対してより高尚な影響力がある」(Valentine [1993] 256) とするが、その理由は、ギャローデット校長にとって人間の道徳的訓練が最も重要であり、それに比べれば単なる知識

習得は重要でなかったからであり、それゆえ同校長は聾唖者の宗教的指導を重視したのである。

このような「宗教的教化」の考え方は、ハートフォード聾唖院に受け継がれ、第3代校長となるW.W. ターナー (William W. Turner 1800-1887) は、「聾唖者の知性を訓練することは重要ではあるが、道徳的感情の育成と比べれば、小さな価値しかない目的である」と述べている。聾唖院の理事会も、「教育は知的なものだけに限定されるのではない。教育は、心、自然に対する情愛、徳性、その主体に対する信心に対処しなければならない」と述べる (Valentine [1993] 256-257)。

教育目的がこのような限定されて設定された要因はいくつか考えられる。それは、教育対象が交信をそれほど必要としない第一次産業や手仕事に就労できる労働力をもっている聾唖者であり、貧困問題を創出しないこと、極言すれば、職業教育の機会がなくても働く場はあったから、盲人の場合のような就労困難と貧困に対する切実さとその対策が、初期聾唖院では生じなかったことも一因であろう。またハートフォード聾唖院は、教育を主機能とする障害児に対する慈善事業の初例として経験が乏しかったことも関連するであろう。開設趣旨がキリスト教徒への育成にあったこと、とくにハートフォード聾唖院にみられるように会衆派信者が主要な支持者であり、同派の聖職者で、広い世俗的な経験のないギャローデットが学校経営の責任者だったことと関連している。初期の入学者の平均年齢が年長であったことも、聾唖院教育と初期公立学校教育との関連を着想させることを困難にしたのである。

以上のような事情のために、教育の目的も内容も直接的で限定的になったと考えられる。ハートフォード聾唖院は、同校での教員経験者でイェール大学出身の聖職者(上野 [1991] 70, 92) を後発の聾唖院に送り込んだから、宗教と道徳および精神的訓練を基本とする教育の考え方も継承され、国内に拡大したのである。その

典型的な一例を挙げておけば、オハイオ州立聾啞院とハートフォード聾啞院の校長を歴任した（上野 [1991] 474-476）C. ストーン（Collins Stone 1812-1870）は、イエール大学出身者で聖職者であった。彼が聾啞院卒業者に期待したことは、有用な市民、勤勉による自活、選挙権の行使であったが、それは、「キリスト教コミュニティ」構成員としての前提条件としてであった（Stone [1869] 17）。

聾啞院が教育的性格を強化するのは、大半の州に聾啞院が設置される19世紀後半である。1850年には、最初の聾教育教員会議（The Convention of American Instructors of the Deaf and Dumb）がニューヨークで開催される。このような会議は、聾教育の基本的な考え方・教育の専門性・情報を共有する場として、事業の成熟度を示す指標であった。

当事者の関与については、親では、上層の聾啞児の親だけが、聾啞者の教育を、言葉の獲得とキリスト教徒への育成を願って求めることができた。

聾啞者自身が教育の機会とその在るべき姿を要求するようになるのは、聾啞院で教育を受けて後のことになる。その意味では、聾者にとって高等教育の意義は大きかったといえる（後述するように、盲人の場合も、公立学校通学制盲学級を主導するのは、高等教育を受けた盲人だった）。手話法の聾啞院は教育歴のある聾啞者が教員として活躍できる場であり、聾啞院卒業生は、各地で聾啞院創設の主導者として貢献した。その初例は、アメリカ聾啞院の卒業生で、オハイオ州立校の教員の経歴があるW. ウィラード（William Willard 1809-1881）であり、彼が1843年10月、インディアナポリスに開設した私立聾啞院は1年後には州立校となった（Warner [1930] 21）。

また、最初の当事者団体は1854年¹¹に結成されたニューイングランド・ギャローデット聾啞者協会（The New England Gallaudet Association of the Deaf-Mutes）であり、1880年には全国聾

者協会（The National Association of the Deaf）がオハイオ州シンシナティで結成される。

II. 盲院における慈善性＝スティグマの認識とその脱皮における教育の目的・本質への連動

以上のように、聾啞院は親の教育への願望から貧窮聾啞児の教育的救済へと発展することで、保護に代わる新しいタイプの慈善事業として開始された。しかし各聾啞院の間には創設の構想とその具体化において相当の違いがあったものの、言語習得によるキリスト教徒への育成と救貧政策の延長としての依存的状態の解消という二つの直接的な教育目的は共通していた。

これに対して、盲院は、貧困盲児に対する慈善的救済を趣旨として開設されたという意味では聾啞院と共通する部分を含んでいた。創設運動の担い手が医師、州議会議員、大商人、聖職者を中心とする博愛家であったからである（彼らの一部は、同じ市の聾啞院創設運動にすでに関与）。個々の聾啞院間の相違は、それぞれの盲院創設過程にも生じた。この相違が、教育において大きな差異を生じさせることになる。

ハートフォード聾啞院の開校準備が整っていたのと酷似しているのは、パーキンス盲院（The New England Asylum for the Blind. 1839年、Perkins Institution and Massachusetts Asylum for the Blindに改称）だった。パリの盲院情報をアメリカに紹介した眼科医J.D. フィッシャー（John Dix Fisher 1797-1850）を中心とする有力者による盲院創設運動ならびに運営組織、校長予定者の外科医でギリシャ独立戦争の英雄、S.G. ハウ（Samuel Gridley Howe 1801-1876）のヨーロッパへの長期派遣による盲教育法の習得がそれである。また、盲院という新しい救済事業に対する豊富な寄金も調達していた。

とりわけハウの校長への起用は、先行していた聾啞院が認識せず、達成できなかった慈善的盲院の盲学校への転換と教育の近代化の成就をもたらすことになり、パーキンス盲院をアメリカの代表的な盲学校に昇格させることになった。その実体はまさに盲院教育の革新であり、

慈善事業からの脱皮であった。

ハウは、キリスト教徒の愛他的慈善を前提としながら、同時にヨーロッパ盲教育に固着していて、盲人の職業自立を妨げていた慈善性の払拭を意図したのである。初期こそ能力別・貧富別の教育を行ったが、しだいに方針を転換させる。慈善的盲人観から脱却するために、教育においては、盲児に対しては、自恃と自分の資質への信頼をもたせ、盲人の有能感を称揚し、通常社会における幸福と有用な自助的生活を奨励した。

社会的には、盲に対するスティグマの解消と教育機会の社会的根拠を探索した。そのために、(公的)慈善事業の評価指標である週1人当たり経費の低さに真っ向から挑戦し、教育を受ける根拠を正義すなわち権利に求め、盲教育を慈善事業という枠内ではなく、教育機関としての社会的位置の向上に努力した。そして実現すべき教育と生活の比較基準を、同時代の晴眼者との同等性においた。すなわち晴眼児の公立学校教育であり、通常のコミュニティでの一員としての生活と貢献である。ハウにおいて、それを実体化するものこそ教育であった(中村[1987a] 55-63)。

パーキンス盲院が聾唖院を含めて慈善的障害児教育機関と異なっていた特色は、教育目的を実現するための教育内容を設定していた点にみることができる。初期の障害児教育機関が、宗教色の濃い道徳教育と盲の場合は職業教育に限定されていたのと比べると、パーキンス盲院は当初から、手工教育以外に読み方・算数・地理・音楽を指導したし、設立期にあった公立学校との教育内容の関連も重視していた。また、教材も豊富だったし、盲教育専門の教員2名をヨーロッパから招聘し、音楽教員1名を雇用していた(中村[1987a] 31-46; 岡[2004] 19)。

アメリカ最初の盲院だったニューヨーク盲院は、新しい救貧事業として最初から着想されていたという意味では、他の盲院よりも進んでいた。というのは、最初の生徒3人は市救貧院からの移籍であり、教育目的として、道徳的・知

的状态の改善とともに、職業教育を行うことが、開設前から計画され、実際に手工が最初から導入され、職業教育としての音楽教育も行われていたからである(岡[2004] 14-18)。ニューヨーク盲院は新しい型の慈善事業ではあったが、財政難と校長の頻繁な交代のために、盲教育の基本方針が確立できず、当初の計画とは異なり職業学校化していったものの、アサイラム化は否定した(中村[1987a] 29)。

アメリカで三番目の盲院だったペンシルベニア盲院(The Pennsylvania Institution for the Instruction of the Blind, 1833年開設)では、ドイツで盲教育教員の経験があったJ.R.フリードランダー(Julius R. Friedlander 1803-1839)を教員として雇用した。彼はハートフォード聾唖院のクラークと同じ専門的な指導者としての役割が期待できたであろうが、同校関係者に惜しまれながら早世し、その後任は安定しなかった。彼は、他の盲院校長と同じように、盲人が職業自立によって依存的生活から脱却することを志向したが、その考え方の特色は、盲人の晴眼者社会への心理的・行動的同化にあった(中村[1987a] 50, 53)。

19世紀前半において聾唖者には就労機会が豊富にあったのに対して、盲人は、通常の事業所への就労困難という独自の事情があり、各盲院ともに就労の場がない卒業生対策に直面していた。この問題への対処は、盲教育と盲院の在り方を分岐させる。一つは、盲人の生活困窮に対する慈善性を強化することであり、もう一つは、教育を強化することによる自立の促進である。アメリカの盲院は、盲成人作業所を併設しつつ、年少盲児を対象とする学校への脱皮を選択する。しかし、教育における理念の抜本的な変更とその実現条件としてのカリキュラムの大幅な改善によって一部の盲院が盲学校に脱皮し、その結果、スティグマとしての慈善性が解消あるいは縮小するのであるが、それは19世紀末を待たなければならなかった。

盲教育の考え方を校長や教員・理事が議論する場として、アメリカ盲教育教員会議(The

Convention of the American Association of Instructors of the Blind) が1853年にニューヨークで初めて開催されて以降、しばらくは開催が不規則であった。その理由は、盲院でも線字や点字の選択問題はあったものの、聾啞院のコミュニケーション・モード問題におけるような深刻で重要な問題がなかったためであるように思われる。また当事者としての親がほとんど登場することはなく、盲院教育の成果である盲院教員の盲人が当事者活動の中心となったし、盲院卒業で高等教育を受けた盲人が、寄宿制盲学校・通学制の公立学校盲学級を創設する中核となった(岡 [2006] 116-117)。イリノイ州で私立盲学校を1848年に開設し、1849年に州立盲院となったS.ベイコン (Samuel Bacon 1823-? Hendrickson [1972] 11) のような事例はアメリカでは他になかったように思われる¹²。

Ⅲ. 19世紀中葉アメリカ障害児教育の精華としての白痴学校における教育の目的・本質への反映

白痴学校は、19世紀前半までの障害児教育の精華であるといえよう。聾啞院と盲院の成果が白痴学校において、開花したからである。聾啞院と盲院は、障害発生数が少なく、専門家が国内に存在せず、新しい慈善事業としての効果的な救済方法を開発しなければならないという共通の事情があった。白痴学校は、その約30年間の聾啞院と盲院の教育的・社会的成果を反映するとともに、慈善事業の限界を克服しようとした成果であった。

これら聾啞院と盲院が築いた成果の第一に、教育の有効性がある。教育では、貧困問題の解決やキリスト教徒への育成に対して、類似の障害児集団に対する24時間コントロールされた家族を模した寄宿生活のなかで、献身的な教員の指導は有効であった。第二に、アサイラムでの保護よりも経費はかかるが、最終的に依存的な障害者が良きキリスト教徒になり、職業自立が可能となることで、聾啞院と盲院の担い手にとって物心ともに満足できる成果が上がることに

なり、結局は儉約となった。第三に、聾啞院と盲院は年少者を対象とする教育目的をもつ通過機関となり、コミュニティへ巣立っていくことで、純粹の教育施設への脱皮を指向した。

聾啞院と盲院が超えられなかった限界あるいは問題点としては、障害に対するスティグマの付与があったが、この現実に対抗する実践と論理の用意がなされるようになっていた。一つは職業自立であり、もう一つは、教育の機会は権利であるとの主張による聴児・晴眼児との社会的根拠の同等性である。この流れから、安上がり経営を旨とする慈善事業の儉約批判も提起される。

白痴学校は、以上のような聾啞院と盲院が築いてきた教育や生活の成果のうえに、その限界や問題点を縮小すべく開設されたという意味において、先行する聾啞院と盲院という障害児教育施設の到達のうえに開花したということができる。校長や教員が、親や本人の後見人的代理者として彼らの意思や願望¹³を代行していた行為(現代の表現でいえばパターンリズム)は、この時期の白痴学校では教育を行ううえで不可欠な条件であった。

アメリカ最初の白痴学校は1848年10月、マサチューセッツ州において州費による実験学校として開始され、1851年に法人校として永続化する。本校は、The Massachusetts School for Idiotic and Feeble-minded Youthを名乗った。慈善事業の象徴的用語であるasylumではなく、さらにその改称であるinstitutionでもなく、敢えてschoolを校名に冠したのである¹⁴。ハウがschoolを校名に冠した理由は教育的・社会的観点から複合的であった(中村 [1987] 46, 63, 111, 170-171, 175, 266-268)。schoolを採用した第一の理由は、ハウがパーキンス盲院でスティグマ解消に苦闘していたからであり、一般に慈善施設名に付されていたinstitutionやasylumという機関名称はまさにそのスティグマを象徴していたためにハウは回避しなければならなかったのである。第二の理由は、教育的機能の強化という学校内活動の改善によって、schoolという外面(校名)の

変更に対応させようとしたからであった。しかもこの教育上の改善に効果的であり、スティグマの解消にも寄与できた。第三の理由は、年少児対象の教育専門機関とすることで、成人をも対象とする保護機関化することを防止するためであった。このことは、schoolをコミュニティと密接に関連した機関であるということも、ハウにおいて含意されていた。

こうして白痴学校は、聾啞院、とくに盲院の教育改善と盲人の社会的地位の向上に関するハウのリードの延長線上に実現したという意味では、聾啞院と盲院の成果のうえに開花したといえる。しかし白痴学校は、後述するように聾啞院・盲院とは不連続線上にあることも、ハウにおいて認識され、そのうえで白痴の学校・教育論が提起されたのである。これこそ、ハウの白痴学校論の真価であり、ハウの教育の目的・本質論の正鵠だった。しかもハウは、これを形式的理念からではなく、盲院経営における盲白痴との苦闘から導出したのであった。

ハウには盲院において白痴と接点があった。同校には盲白痴児が入学してきたが、職業自立によって盲児と盲院に対するスティグマを解消しようとしていたハウには、盲白痴児の在学を是認できるはずがなかった。パーキンスは創設当初から入学除外対象を設定していた。いいかえれば、白痴児には、聾啞児・盲児の教育目的・内容を適用できないことも、ハウにおいて認識されていたのである。

したがって、そのような状態にある白痴児を教育する白痴学校は、学校および教育の新しい概念を提起し、それがあつた程度、社会的に承認されることが必要であつた。それまでの聾啞院・盲院、そしてその後公立学校において、キリスト教徒への育成とその基盤にある言葉の教育、そしてその後の3R's教育を初めとする初等学校と同等の科目を指導することが教育であり、そのような教育の場が学校であると考えられていた時代に、3R'sの基礎的能力はおろか、身辺自立さえできない白痴児を教育の対象と考え、彼らを教育する場を学校として提起したこ

とは、画期的なことではあつた。とりわけ、白痴学校創設期はキリスト教が生活を支配していた時代であつたから、言葉の習得は、コミュニケーションの手段である以上に、キリスト教徒になるための必須条件であつた。聾啞児の教育に関心を示したのがキリスト教であつた半面、聾啞児のキリスト教社会への参加を拒んだのもキリスト教であつた(20世紀初頭に、親優生学的キリスト教聖職者が精神薄弱児の教会参加を妨げた(中村[2004] 91-92)のも、同じような理由であろう)。それだけに、言葉に問題をもつ子どもを対象とする白痴学校創設の発想自体、時代を超えていたと言えるのである。

ハウの白痴論の特長は、白痴児およびその教育の社会的位置づけにあつたと思われる。白痴児を同胞・隣人愛の対象および権利主体とするのは、盲児の場合と同じである。しかし盲児を対象とする権利論が社会に受容されるのは、その教育成果が彼の主張通りに現実化されたからであり、白痴児を権利の受益者に含めるというレトリック上の整合性だけでは、白痴児権利論が受容されることは困難だった。しかし、十分に社会に受容されたわけではないとしても、彼の白痴論の主張が1852年のマサチューセッツ州義務教育法以前の段階で提案されたことは、もっと重視されるべきであろう。

教育論における白痴児の行動理解と指導の具体化については、第一世代の教員となるニューヨーク校の校長、H.B. ウィルバー(Hervey Backus Wilbur 1820-1883) 医師やマサチューセッツ校のJ.B. リチャーズ(James B. Richards 1817-1886) が述べており、ハウの一般論に実体を与えた。最も指導が困難だったリチャーズの生徒は、以下のような状態であつた(Richards [1885] 175)。

8歳6ヶ月くらいの男児、目に光る物をかざしても瞬きしない、移動の力なし、下肢はまひ、痛覚がなく、触覚もない、寝返りせず、何もしない。

確かにリチャーズの指導法は、子どもが反応するまで何度でも繰り返して刺激を与えるとい

う単純なものであったが、それでも行動の変化が生じる例があったのである。それは、子どもがもっている、唯一あるいは最小限の欲求という現時点の状態に対応しつつ、それから「欲求の階段を一段ずつ登って、人間のあらゆる発達の尺度を上がっていく」(Richards [1885] 175)という信念のもと、観察および創意工夫と愛情に裏づけられた指導であったからである。

しかし白痴問題において提起された画期的なハウの所論は、実践論としては具体化されなかった。ウィルバーの臨床的な教育方法(New York Asylum [1866] 15) やリチャーズの情念的な教職論は、重要ではあるが部分的でしかなかった。というよりも、先覚者の白痴教育論は時代よりも遙かに進んでいたということであろう。教育可能か否か、その教育可能性が通常のエデュケーションとどのように連続的な関係にあるかが、創設期の白痴学校の教育目的・本質に対する社会の期待であった。これが、創設期に明確・明瞭に解決されたというよりも、聾唖教育創始に当たって鍵となったキリスト教徒への育成可能性と同じように、とりわけ大きな行動の改善を示した白痴児の事例をもとに、白痴学校を創設する説得の根拠になったといえよう。このことが後に、精神薄弱児は教育可能か、教育によって行動の変化が生じるか否かが学校内の評価ではなく、彼らの行動変化の量と質(たとえば貧困や非行)に対する疑問が社会的に確立し、白痴学校が隔離施設化する根拠になるのである(中村[1987] 534-536)。そして現代に至るまで、白痴は、精神薄弱・精神遅滞・知的障害あるいは重度・重複障害として、社会的には最も理解が困難な障害カテゴリーとして、存在し続けたままである¹⁵⁾。

結語—スティグマ認識と教育論

1. 障害(児)および障害児教育とスティグマ

草創期の障害児教育においてスティグマに関連する最大の要素は、事業の慈善性であった。というのは、事業の慈善性は、教育の目的も内容も規定するからである。そこで最初に、19世

紀前半の障害児教育事業がその解消に苦闘した慈善性について確認しておかなければならない。それは慈善の二義性である。慈善性がスティグマの付与と関連するのは、物心両面における依存的存在として障害児を見なすことになったからであり、それは職業自立を妨げる最大の問題となったことは、すでに盲院でみたとおりである。

しかしながら、慈善はキリスト教における当然の倫理として、弱い存在である障害児に対する同胞愛や隣人愛の発露の源であった。したがって、この意味での慈善性は称揚されるべきであったし、現実に財源確保のためのレトリックでもあった。聾唖院が慈善性に制約を加える見解は、「私費生にも開放されている」との意味であったように、聾唖院ではスティグマを意識した慈善性の限定ではなかったのである。

すなわち、称揚されるべきキリスト教的・個人的な慈善としての救済行為と、要保護的な状態にある人々に対する救済がスティグマを生じるという慈善の社会的な機能や意味の違い、いわば慈善事業の負の面に対する認識を意識せず、前者の意味で「慈善」を使用する傾向にあり(Mitchell [1818] 33, 36)、後発の聾唖院も先例に倣ったのである(たとえば1843年創設のインディアナ州立校。Warner [1930] 31-32)。「聾唖院は終生保護施設ではなく、聾者の教育のための学校である」という主張が出てくるのは、19世紀半ばであった(Best [1914] 148)。

スティグマの意識が盲院で痛切に感じられたのは、職種が極度に制限されているために、職業自立が困難となるという事情だけでなく、卒業後にどのような社会生活を送らせたいかという学校側が描くビジョンの濃淡の差でもあった。

2. スティグマ解消の努力と教育目的・本質の変化

ハウは、盲人用キリスト教典を多数印刷したようにキリスト教教育に熱心ではあったが、職業自立を妨げるスティグマの存在を認識するようになったのは、職業教育に力を注いだにもか

かわらず、卒業生の生活状況が改善されない現実に直面したからである。それだけ、盲教育の職業自立に対する貧困解消という社会的圧力が大きかったといえることができる。慈善はキリスト教徒には確かに「誇らしい積極的な意味」(上野 [1991] 40) があった。ハートフォード聾唖院は、聾唖児に対して教育による救済の有効性を具体的に示したという意味で功績があったが、彼らは慈善のネガティブな面への認識が希薄であった。校長が、同胞愛に基づく慈善性に基盤をおく聖職者であったためであろうと思われる。聾唖院→盲院→白痴学校への展開は理論的・実践的な発展ではあったが、それは予定されていたわけでもないし、簡単に発展したわけではなかった。問題の所在と改善策を認識する校長等、新しい理論や実践を構想し、実現する力とそれを支える資源があつてこそ、発展が可能であった。障害に絡むスティグマ問題はその一つであった。

障害児教育の草創期においてほとんどハウだけが、スティグマ問題に対して総合的な対応をしたと思われる。彼の対応は、スティグマの認識だけでなく、教育の改善と社会的理論化、寄宿舎の小舎への変更、盲人像の変更にまで及んだ。19世紀中葉までに限っていえば、盲院教育では、就労困難な盲成人のために成人授産所の開設と経営の分離、盲人の働く権利と平等な市民の要求、分散的処遇論の提案によってスティグマの付与の軽減に努力し、1860年代以降における盲院から盲学校への脱皮の基盤を築いたといえる。白痴学校は、教育・学校の根本的問題と社会的関連について優れた問題提起をした。その新鮮さは白痴学校初期こそ影響力があつたものの、白痴生徒の校内滞留問題に対する有効な手段がないまま、1860年代アメリカの貧困・犯罪等の社会病理の拡大とその原因としての精神薄弱説と白痴学校の施設化への序曲を迎えることになる。

何を教育の目的とするのか、教育とは何かは、キリスト教徒への育成と職業自立を前提としながらも、障害カテゴリー、時期、担い手等の資

源によって左右された¹⁶。19世紀前半というアメリカ障害児教育草創期においては、教育の目的も本質も、狭い、固定された方向と内容から、しだいに、より広い人間的基盤と社会構成員の育成という方向に拡大し、白痴教育においては、障害児教育の新しい次元を期待させるに至る。義務教育制度がほとんど存在せず、公立学校制度が未熟な段階において、公立学校制度から分離した事業のなかで、貧困とスティグマを軸にしながら、障害児教育が営まれたのであった。

【註】

1. 基本的観点等の研究方法および時期区分については、中村・岡 (2009) 117-124に準拠している。
2. 富裕層の親のなかに、イギリスの聾唖院に留学させる例もあった。国内で聾児を教育するという需要は上層の親にみられ、聾唖院創設が構想されるものの、実現しなかったり、存続が永續化しない例があった。荒川 (1970) 257-261; Sanborn (1876) clx-clxii; Valentine (1993) 12-13 およびバン・クリーブ/クローチ (1993) 26-30参照。
3. ハートフォード聾唖院の創設提案は、1812-14年の間、T.H.ギャローデットのアリスとの面識から発するとする説も多い。たとえばバン・クリーブ/クローチ (1993, 34-35)。このような説明は、かなり古くから成立していたようである (Anonymous [1858] 519)。しかし1812年5月には、後述する別の聾唖児の親による教育可能論の雑誌掲載があり、6月にはコグスウェルの働きかけから始まったコネチカット州会衆派聖職者協会による聾唖者数調査が発表されていることから (Valentine [1993] 20-22)、聾唖院創設運動は、ギャローデットが個人的な関心をもつ以前から、聾唖児の親の主導により、開始されていたのは明らかである。荒川勇 (1970) 266-272も参照。
4. <http://www.cslib.org/memorials/gilbertsbio.htm>; <http://bioguide.congress.gov/scripts/biodisplay.pl?index=G000178>
5. バン・クリーブ/クローチ(1998)からの引用は、セイラム (土谷訳ではサレム)、キンブル (同じくキンボール) のように、邦訳を変更した箇所

アメリカ合衆国草創期における寄宿制障害児教育施設慈善性と教育目的・本質との関連

がある。

6. 上層の聾唖児の教育内容としてギャローデットが何を想定していたのかは、L.クラーク (Laurent Clerc 1875-1869) との契約書から推測できる。バン・クリーブ／クローチ (1998) 39。
7. コグスウェルの祖父と父親は会衆派の聖職者であり (Valentine [1993] 22)、1815年4月13日の聾唖院設立に関する協議に参加した他の8人中2人は会衆派の聖職者だった (そのうちの1人はT.H. ギャローデット (Thomas Hopkins Gallaudet 1787-1851)。Valentine [1993] 23)。
8. この例が、民間慈善事業に対するアメリカ最初の公費支出であるとされる。
9. ハートフォード聾唖院では1819年5月発行の第3年次報告において、初めて職業に関連した教育内容として園芸や手仕事 (mechanical) に言及する。それに対しては、活発な勤勉習慣の形成、健全な身体的健康、娯楽、道徳と規律の基礎としての不規則で怠惰な生活の防止という多様な意味が付与されていた。しかし少なくとも初期のハートフォード聾唖院では、手を用いた仕事は子どもの境遇に左右されて用意されており、手を用いた作業の指導の種類と程度は、個人の能力だけでなく親の願望に応じて配分されていた。貧しい親の場合には自活手段の獲得のためであった。Connecticut Asylum Annual Report, 3rd (1819), 4-5。
10. <http://www.ormsby.org/genie/Miscellaneous/Barbee.html>
11. バン・クリーブ／クローチ (1998) 86. ギャローデット大学のTimeline (<http://archives.gallaudet.edu/Timeline.htm>) ではNew England of the Deafの結成は1853年となっている。この違いは、両者の名称にもやや違いがあり、Van Cleve and Crouch (1989) での1854年説が「正式に」(p.87) 結成された年を指していることによるのかもしれない。
12. バイコンの主導は、州都ジャクソンビルですでに胚胎していた盲院創設運動なしには不可能だった (Hendrickson [1972] 1-11)。アメリカの盲院創設では盲人の関与がほとんどなかったことは、近代日本では盲人主導の盲院開設運動があったことと対照的であり、その意味づけの再検討が必要であろう。
13. アメリカの最初の白痴学校は、1848年にH.B.

ウィルバーによりマサチューセッツ州ベアリイに私立学校として開設されるが、聾唖院のように公共化することではなく、富裕層の学校として発展していった。中村 (1987) 643-677。

14. マサチューセッツ白痴学校は、1848年10月開設の州費による実験学校段階 (The Experimental School for Teaching and Training the Idiotic Children) でも、州費を財源として恒久化した1851年の法人立校開設でも、schoolを名乗っている。1854年に開校したペンシルベニア校も初代校長がマサチューセッツ白痴学校の教員だったリチャーズであったこともあり、初例のschoolを踏襲する (The Pennsylvania Training School for Idiotic and Feeble-Minded Children) が、1851年に開設したニューヨーク州立校はThe New-York Asylum for Idiotsである。
15. たとえば学校教育とは何かという議論は、インクルージョン運動の前夜、1980年代に再度、繰り返されることになるほど、この問題は根本的な問題である。J.M. カウフマン (James M. Kauffman) ら、いわゆるspecial educatorとスタインバック夫妻 (W. and Susan Stainback) らとの間の最重度児教育論争がそれである。中村 (1987b) 152-153, 156。
16. 慈善性の残存は実態の反映でもあった。たとえばインディアナ州立校は19世紀半ば過ぎまで、アサイラムの機能も持続していた。教育終了後もかなりの数の貧しい聾唖者が被保護者として聾唖院に毎年残っていたという (Warner [1930] 23)。

引用文献

- Akerly, S. (1926) Address delivered at Washington Hall in the City of New-York, on the 30th Ma, 1826, as Introductory to the Exercises of the Pupils of the New-York Institution for the Instruction of the Deaf and Dumb. E. Conrad, New York.
- Allen, V.H. (1893) A Brief History of the Pennsylvania Institution for the Deaf and Dumb. In E.A. Fay (ed.) Histories of American Schools for the Deaf, 1817-1893. Vol.1, The Volta Bureau, Washington, D.C.
- 安藤房治 (2001) アメリカ障害児公教育保障史。風間書房。
- Anonymous (1858) Life and Labor of Thomas H. Gal-

- laudet. North American Review, 87, 517-532.
- 荒川勇 (1970) 欧米聾教育通史. 峯文閣.
- Best, H. (1914) The Deaf: Their Position in Society and the Provision for their Education in the United States. Thomas Y. Crowell Co., New York.
- Best, H. (1943) Deafness and the Deaf in the United States. Macmillan, New York.
- Connecticut Asylum for the Education and Instruction of Deaf and Dumb Persons. Annual Report, 3rd (1819) of.
- Constitution, Charter, and By-Laws and Documents Relating to the Pennsylvania Institution of the Blind, at Philadelphia (1837).
- Currier, E.H. and T.F. Fox (1893) A History of the New York Institution for the Instruction of the Deaf and Dumb. In E.A. Fay (ed.) Histories of American Schools for the Deaf, 1817-1893. Vol.1, The Volta Bureau, Washington, D.C.
- Fosdick, C. (1893) A Short History of the Kentucky School for the Deaf. In E.A. Fay (ed.) Histories of American Schools for the Deaf, 1817-1893. Vol.1, The Volta Bureau, Washington, D.C.
- Freund, E.D. (1959) Crusader of for Light Julius R. Friedlander Founder of the Overbrook School for the Blind 1832. Dorrance and Co., Philadelphia.
- Hendrickson, W.B. (1972) From Shelter to Self-reliance, A History of the Illinois Braille and Sight Saving School. The Illinois Braille and Sight Saving School, Jacksonville, IL.
- Mitchell, S.L. (1818) A Discourse by Pronounced by Request of the Society Instructing the Deaf and Dumb, at the City Hall of the City of New-York, on the 24th Day of May, 1818. E. Conrad, New York.
- New York Asylum for Idiots. Annual Report, 15th of (1866).
- 中村満紀男 (1987a) アメリカ合衆国障害児学校史の研究. 風間書房.
- 中村満紀男 (1987b) 重症心身障害児の行動理解と教育の意義に関する研究. 秋田大学教育学部研究紀要教育科学, 37, 147-156.
- 中村満紀男 (2004) 優生学と障害者. 明石書店.
- 中村満紀男・岡典子 (2009) 障害児教育における目的・本質論の歴史的変遷とその理論的・実践的意義-序説. 障害科学研究, 33, 113-126.
- 岡典子 (2004) 視覚障害者の自立と音楽. 風間書房.
- 岡典子・佐々木順二・木村素子・趙源逸・米田宏樹・中村満紀男 (2006) 20アメリカ合衆国の公立学校特殊学級における統合と排除の両義的展開とインクルーシブ教育の源泉-序説-. 心身障害学研究, 30, 113-127.
- Parent (1901) The deaf and dumb. *Association Review*, 3, 135.
- Peet, H.P. (1854) List of Pupils of the New York Institution. *American Annals of the Deaf and Dumb*, 6(4), 193-241.
- Richards, J.B. (1885) The Education of the feeble-Minded. Proceedings of the National Conference of Charities and Correction, 12th Annual Session. 174-178.
- Sanborn, F.B. (1876) The Public Charities of Massachusetts During the Century Ending Jan.1, 1876: Report Made to the Massachusetts Centennial Commission, Feb.1, 1876.
- Stone, C. (1869) An Address upon the History and Methods of Deaf Mute Instruction. Columbus Printing Co., Columbus.
- 上野益雄 (1975) アメリカ聾教育におけるマニュアル体制の成立要因について. 東京教育大学教育学部紀要, 21, 111-117.
- 上野益雄 (1991) 19世紀アメリカ聾教育方法史の研究-1840~1860年代を中心に-. 風間書房.
- Valentine, P.K. (1993) American Asylum for the Deaf: A first experiment in education, 1817-1880. Ph.D. dissertation of at the University of Connecticut. UMI, Ann Arbor, Michigan.
- バン・クリーブ, J.V./クローチ, B.A. 土谷道子訳 (1993) アメリカ聾者社会の創設 誇りある生活の場を求めて. 全国社会福祉協議会. Van Cleve, J.V. and Crouch, B.A. (1989) A Place of their Own: Creating the Deaf Community in America. Gallaudet University Press, Washington, D.C.
- Warner, W. (1930) The Indiana State School for the Deaf. M.A. dissertation, The University of Chicago.
- Williams, J. (1893) A Brief History of the American Asylum, at Hartford, for the Education and Instruction of the Deaf and Dumb. In E.A. Fay (ed.) Histories of American Schools for the Deaf, 1817-1893. Vol.1, The Volta Bureau, Washington, D.C.
- 2009.9.1 受稿、2010.1.15 受理 ——

The educational purpose of schools for the deaf, the blind, and the idiot and its relation to the stigma of charity attached to them in the early nineteenth century America

Makio NAKAMURA

The purpose of this paper is to clarify how the school officials and the persons concerned (people with disabilities and their parents) established the basic concepts of the educational facilities for the deaf, the blind, and the “idiot” in the first half of the nineteenth century America, and changed them. The school officials of the deaf had no awareness of stigma produced by charity, for they were clergymen, and the deaf students could engaged in primary industries. In comparison with the deaf, the blind could not find work chances for blindness. While the school officials of the blind struggled hard to find workplace for their student’s independence, they took recognition that charity brought forth stigma and obstructed their student’s independence. Therefore, the officials coped with stigma for students through the improvement of their education and new theory on their education and life in community. These official’s efforts led to the transformation of charity schools into residential public schools for the deaf and the blind in the late nineteenth century. Schools for idiot established in the end of the 1840’s were historically the flower of charity schools for students with disabilities, given that schools for idiots absorbed all results of their efforts at schools for the deaf and the blind and reflected them in the educational practices for idiots. Furthermore, schools for idiots had lofty ideals such as drastic innovation of concepts of education and function of school. However, their revolutionary new ideas were only imaginary.

Key Words: first half of nineteenth century America; asylum; deaf; blind; idiot; charity; stigma